# 高橋晃一著『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開—vastu概念を中心として—』

袴谷憲昭

名は体を顕すというが、本書のやや長めのタイトルはよくその内容を表している。本書は、素、博士学位請求論文として二〇〇四年三月に東京大学へ提出されたものに、学位授与の同年九月以降に若干修正を加えて、今回、「インド学仏教学叢書（Bibliotheca Indologica et Buddhologica）」の第一二冊目の本として山喜房仏書林より刊行されたものである。

本書の概要をその「目次」を引き写すような形で示せば次のようになる。本書はこの叢書の形式に従って横組であるが、「目次」も、横組に合致するかのように、最近若い世代の研究者が多く採用する傾向にあるウィトゲンシュタイン風の科文式アラビア数字下に示されている。これは著者高橋晃一博士の大切な志向の一端を示していると考えられるので、左の提示に当っては、他は縦組様式に自動的に変更するが、問題のアラビア数字箇所についてはそのままとする。ただし、文中にて呼称する必要のある時は、第一次レベルの数字は「章」で、第二次のそれは「節」で、第三次のそれは「項」で呼ぶことにしよう。また、以下の提示においては、元の「目次」では改行になっているものを「項」のレベルでは追込みで示したことをお断りしておきたい。

はじめに
1 序論
1.1 テキストについて
1.1.1 『瑜伽師地論』について、1.1.2 『菩薩地』について、1.1.3 「摂決択分中菩薩地」について
1.2 先行研究の問題点と本書の課題および構成
1.2.1 『菩薩地』の思想史的位置づけに関する先行研究、1.2.2 本書の課題、1.2.3 考察の手順と本論の構成
2 本論
2.1 『菩薩地』「真実義品」のvastu概念について
2.1.1 はじめに、2.1.2 『菩薩地』「真実義品」のvastuの二つの側面、2.1.3 vastuが言語表現し得ない本質を持っていること

に関する三つの論証、2.1.4 分別から生じるvastuについて、2.1.5 小結
2.2 「摂決択分中菩薩地」の五事説について
2.2.1 はじめに、2.2.2 「摂決択分中菩薩地」の五事説における*vastu、2.2.3 言語表現し得ない本質を持っていることに関する三論証の五事説における展開、2.2.4 分別から生じるvastuの五事説における展開、2.2.5 小結
2.3 「摂決択分中菩薩地」の三性説について
2.3.1 はじめに、2.3.2 「摂決択分中菩薩地」の三性説と『解深密経』の三相説、2.3.3 三性説と五事説の思想史的関係、2.3.4 言語表現し得ない本質を持っていることに関する三論証の三性説における展開、2.3.5 言語表現から生じる*vastuについて、2.3.6 小結
3 結論
4 テキスト・訳註
凡例、シノプシス、The *Tattvārthapaṭala* of the *Bodhisattvabhūmi*、The *Tattvārthapaṭalaviniścaya* of the *Bodhisattvabhūmiviniścaya*、『菩薩地』「真実義品」和訳、「摂決択分中菩薩地」抄訳
5 使用テキストおよび略号、参考文献
English Summary

以上が本書の概要であるが、総計二三〇頁からなる本書中、論述部分の中核ともいうべき第二章の「本論」が五四頁であるのに対して、その論述を支える文献資料研究としての第四章の「テキスト・訳註」箇所が一三八頁と、「本論」の二倍強三倍近くに及んでいることからも分かるように、本書は、Yogācāra（瑜伽行派、実修行派）の関連文献資料の厳密な訳註研究を踏まえた上で、Yogācāraにおけるvastu概念の思想的展開を追究しようとしたものなのである。

そのキー概念ともいうべきvastuは単にYogācāraのみならずインドの哲学思想一般においても重要な用語であり意味も多様であるだけに難解な用語でもある。従って、そのようなvastuという用語の概念を、まずはYogācāraという限定の中で、その派の形成した文献を思想史的に究明しながら、明確にしていこうと努めた本書の成果は称賛に値しようし、今後のvastu研究は賛否両論共に本書を出発点の一つに加えることが要求されるであろう。

さて、そのvastuという語は、動詞の語根VAS-（住む、留まる）に第一次接尾辞-tuが付されて派生した名詞で「住むところ」「座」「場所」「実在」などを意味する重要な用語である（Monier-Williams, *SED*, p.932, cols.2-3参照）が、極卑近な例を取っていえば、例えば、冒頭で不用意に「名は体を顕す」というような諺を使ってしまったが、その名の付せられる基をなす「体」を表す有力なインドの言葉の一つがvastuでもあるのである。それゆえ、vastuを重視する思想傾向にあるインドの哲学思潮は、付せられる名称を仮りのものとして軽視して、それなしには名称すらありえないと考えられる「実在」を重視し、更には「唯一の実在（the one real substance or essence which has no second）」を追求していきがちになる。Yogācāraもイン

ドにあっては決してその例外ではない。否、むしろ、「実在」に対して否定的であった仏教にあっても、積極的にvastuをその思想の主要なテーマに取り込もうとしたのがYogācāraであったとさえ言えるほどであるが、著者高橋晃一博士がそのvastuの考察の基点に据えたのが『菩薩地（*Bodhisattvabhūmi*）』「真実義品（Tattvārthapaṭala）」である。

この基点となる文献を、著者は、第一章の「序論」の第一節において、これを含むより大部な一大叢書的なYogācāra文献である『瑜伽師地論（*Yogācārabhūmi*）』全体の中で思想史的に位置づけ、更に、その「真実義品」を、『菩薩地』を含む「本地分」よりもはるかに思想的展開を示している「摂決択分」中の「真実義品決択」との関連において検討しなければならないことを示唆した上で、「序論」の第二節では、先行研究との絡みで著者自身の課題を設定して、次のように述べている。

したがって、本書では、文献相互の密接な関係が指摘されている『菩薩地』「真実義品」と「摂決択分中菩薩地」の記述を基に、『菩薩地』の思想が、「摂決択分」の五事説・三性説に関する記述の中でどのように受容され、展開していくのかを考察することを課題とする。（1.2.2、一六頁）

この課題の下に選び定められた論点は次のとおりである。

さて『菩薩地』と「摂決択分中菩薩地」の関係について、具体的には次の三点にしぼって考察する。

①『菩薩地』「真実義品」のvastu概念と五事説・三性説の思想史的関係

②vastuが言語表現し得ないことに関する三つの論証に見られる『菩薩地』から「摂決択分」への思想的展開

③分別からvastuが生じるという教説に見られる『菩薩地』から「摂決択分」への思想的展開（1.2.3、一六頁）

この三つの論点に従って、「本論」の論述が進められていくことになるのであるが、それらの論点は各文献の記述の中で複雑に関係しているので、実際には、右の論点順に進められるのではなく、文献の一応の枠の下で、vastu概念と五事説と三性説とが順次に考察されていくのである。そして、この大きな三つのテーマが、順次に、第二章「本論」の、第一節と第二節と第三節のテーマともなっているのであるが、それらについては、先に示した内容概要中の2.1、2.2、2.3の節題とそれぞれの細分の項題とを参照されたい。

次に、その各節の内容を簡単に紹介することにしよう。

第一節は、『菩薩地』「真実義品」で用いられているvastuについて、その用語の意味に二つの側面を指摘し、またvastuの実在とnāman（名）の非実在を論証する、後にツォンカパによって「依他起が所分別について空であることを証明する三論証」と呼ばれたものの特色をその原初形態において探り、また、〝vikalpā vastu janayanti（分別がvastuを生み出す）〟という分別優位のために一見vastuの実在性を否定するように見える考え方を「分別から生じるvastu」として捉え、八種の分別と三種のvastuとの関係から、必ずしもvastuと矛盾するものではないとの方向に解釈して、五事説や三性説の分析へ

の準備としたものである。

これらの中でも、vastuの意味に二つの側面を見出した初めの方の記述は、本書の考察の基調音をも伝えていると思われるので、左に引用しておきたい。

『菩薩地』「真実義品」において中心的な役割を果たしているvastuは、「仮説（prajñapti）のための語の原因（nimitta）である基体、仮説のための語の原因（nimitta）である拠り所であり、言語表現し得ない本質を持つという点で勝義的実在であるvastu」という一文に端的に表現されているように、次のような二つの側面を持っている。

(1)言語表現の基体

(2)言語表現し得ない本質を持つ勝義的実在（2.1.2.1、一八頁）

因みに、ここで、右引用中の訳文と原文とを照合しておくと、「基体」の原語はadhiṣṭhāna、「拠り所」のそれはsaṃniśraya、「勝義的実在」のそれはparamārtha-sadbhūtaである。

第二節からは、考察の主要文献が「摂決択分中菩薩地」へ移り、その中心テーマは五事説となる。この「五事（dngos po lṅga, pañca-vastu）」につき、著者は、同上文献中より特に二箇所の説明を取り上げて、まずその性格を明確にしようと試みている（2.2.2.2）。

その最初の説明を定義として押えた著者は、「五事」の各々の主要説明語を次のような和訳で示す。カッコ内に示したものは、著者は示していないが、念のためにここで補った玄奘訳語である。

ⓘ相：言語表現（*abhilāpa）のための語の基体となった*vastu（所有言談安足処事）

ⓘⓘ名：相に対する名称（於相所有増語）

ⓘⓘⓘ分別：三界において働く心心所としての諸法（三界行中所有心心所）

ⓘⓥ真如：法無我として現れた、聖者の智慧の活動領域であり、すべての言語表現（*abhilāpa）のための基体とならない*vastu（法無我所顕聖智所行非一切言談安足処事）

ⓥ正智：まったく出世間的なものと世間的であり出世間的なものの二種（一唯出世間正智、二世間出世間正智）

これらの中のⓘとⓘⓥにつき、著者が、「相と真如だけが*vastuという語を用いて定義されている」（三六頁）と指摘していることは、先のvastuの意味の両側面とも連動する、著者にとっての重要な考えの表明であることに注意されたい。なお、著者が「基体」と訳している元のチベット訳語はgzhiī gnasで、これに対応するサンスクリット原語は現段階では厳密な形では回収されていないと思う。

著者が第二に注目している説明は「五事」の「特徴（mthan nyid, *lakṣaṇa、相）」を示そうとした箇所であるが、この五つも直前の場所に従って列挙すれば左のとおりである。

ⓘ相：分別の活動領域（分別所行相）

ⓘⓘ名：日常的言語活動の場（言説所依相）

ⓘⓘⓘ分別：相を活動領域とするもの（相為所行相）

ⓘⓥ真如：正智の活動領域（正智所行相）

ⓥ正智：真如を活動領域とするもの（真如為所行相）

また、この場合のⓘとⓘⓥについても、著者は重ねて次のように指摘している。

相は言語の基体となった*vastuであり、名はその相に対して付与される名称、分別は相を対象とする心の働きということになる。一方、真如は聖者の智慧すなわち正智の活動領域であり、言語表現の基体とならない*vastuである。（三六頁）

このような考察の後、第一節で提示されていた「三論証」や「分別から生じるvastu」の問題が、五事説に絡めて「摂決択分中菩薩地」においていかに展開されているかが検討されているが、ここでは、その第二節を著者自身が締め括っている一文を提示するだけに止めよう。

従来、『菩薩地』のvastu概念と「摂決択分」の五事説の関係について充分な考察がなされてこなかった。しかし、五事を構成する要素である相・名・分別・真如という術語は類似の用例を『菩薩地』「真実義品」に見出すことができることから、両者は密接に関係していることが伺える。また、『菩薩地』で重要な論点となっていた、vastuが言語表現し得ない本質を持っていることに関する三論証や分別からvastuが生じるという教説が「摂決択分」の五事にも引き継がれていた。したがって、「摂決択分」は『菩薩地』のvastuに関する思想の中で用いられた術語を利用し、そこに正智という概念を加えて五事とし、『菩薩地』「真実義品」のvastuを分析しようとしたものと考えられる。

『菩薩地』のvastuが「摂決択分」の五事説によって、言語表現の基体としての側面である相と、言語表現の基体とならない側面である真如に分析された結果、相が三論証および分別から生じるvastuに関する議論の中心となった。それは、言語表現の基体という側面と言語表現し得ない勝義的実在という側面が同一のvastuにおいて成り立つという『菩薩地』の思想と比べると、議論の中心が世俗的側面に置かれるようになったことを意味している。（2.2.5、四九頁、傍線袴谷）

教義研究史的観点からいえば、著者は、引用末尾の傍線箇所に明らかなように、その意味での『菩薩地』からその「摂決択分」への思想展開を当然のこととして認めているが、引用前半に示される著者の基本的立場は、『菩薩地』と「摂決択分」との間に思想的異質性を認めて両者間に一線を画そうとする見解に対しては、むしろ同質性の中での教義の発展展開を強調するものなのである。

さて、最後の第三節では、第二節と同じ「摂決択分中菩薩地」を中心に、『解深密経』や『顕揚聖教論（略号、『顕揚論』）』なども当然の比較対照文献に加えながら、確立された唯識思想からいえば最重要概念の一つである「三性」もしくは「三相」が考察されている。この節においても、注目すべき様々な指摘がなされているのであるが、複雑な面もあるので、下手に私が要約するよりは、先と同様に、あるいはそれ以上に、著者自身によるこの節の結論を利用させてもらった方がよいと思うので、左に多少長くなるが、それを引く。

すでに指摘されているように、「摂決択分」の三性説は『解深密経』の三相説を受け継いでいる。しかし、これまであまり注目さ

れてこなかったが、『解深密経』の三相説は五事に関わる概念を前提に構成されており、このことから、三性説あるいは三相説以前に、相・名・分別・真如という五事を構成する概念が術語として関連を持って説かれており、それを前提に三性説が形成されたと考えられる。

ところで、「摂決択分」の三性説に関する記述の中でも、『菩薩地』と「摂決択分」の五事説で説かれていた言語表現し得ない本質を持つことに関する三論証への言及があり、また分別から生じるvastuに類似した説も確認できるが、その内容には変化が見られる。

まず、『菩薩地』や「摂決択分」の五事説で説かれていた、vastuあるいは相が言語表現し得ない本質を持つことに関する三論証は、「摂決択分」の三性説でも言及されているが、その記述に基づく『顕揚論』では、『菩薩地』以来の論証②が新たな論証Cに置き換えられている。

また、言語表現から*vastuが生じるという主張は、一見『菩薩地』や「摂決択分」の五事説で説かれていた分別からvastuあるいは相が生じるという見解と類似しているが、その内容から直接関係が深い教説とは言い難い。むしろ、遍計所執性から依他起性が生じるという表現には、*vastuが雑染のものとなるという意味を読み取ることができ、『菩薩地』以来の教説との類似点が見られる。しかし、これも時間的な相互因果関係を説くものではないという点で、『菩薩地』以来の見解を継承したものとは言えない。

「摂決択分」の三性説では、三論証に関してはそれ以前の教説を意識しながらも、新たな説が登場する素地を提供していると言える。また言語表現から生じる*vastuに関しては『菩薩地』以来の見解との直接的な関係は認められないものの、言語表現から生じる*vastuを影像として説明する点に唯識思想との関連を予想させる。こうした意味では「摂決択分」の三性説に関する記述は、『菩薩地』や「摂決択分」の五事説で説かれていた内容が新たな段階に移行するための過渡期の思想形態を残していると考えられる。

(2.3.6、七〇—七一頁、傍線袴谷)

引用中に傍線で示した箇所が、著者が第三節において初めて明確に論証しようと意図した見解もしくは強調した見解である。

以上で、第二章の「本論」を了えた後、著者は手短ながら、第三章を別出して「結論」を述べ、次に、本書で最も大部な第四章としての「テキスト・訳註」の提示に移る。まず、『菩薩地』「真実義品」のサンスクリットテキストが“The *Tattvārthapaṭala* of the *Bodhisattvabhūmi* (A Revised Edition of the Sanskrit Text)”として与えられ（pp.85-117）、次に、それに対する「摂決択分」箇所のチベット訳テキストが諸版対校の下に“The *Tattvārthapaṭalaviniścaya of the *Bodhisattvabhūmiviniścaya”として与えられている（pp.121-149）。なお、これに先立って、両テキストに対しては、「目次」と同じく、ウィトゲンシュタイン風の数字の科文の下に、それぞれのシノプシスが示されている（pp.78-80, pp.81-82）が、これらは両テキストのみならず、その後の、両テキストに基づく訳註箇所

にも踏襲されているので照合に便利である。

ところで、第四章のうちでは、「真実義品」のサンスクリットテキスト作成に最も神経を使われたのではないかということは、新たに四種の写本（Cambridge写本、京大写本、R. Sāṅkṛtyāyana写本、Nepal写本）を見直して作業を進められたことによって窺い知ることができる。ただし、意外に思ったことは、WとしてWogihara ed.の読みは参照されているのに、BBhdの略号で本書巻末の略号表（p.213）中にも記載されているNalinaksha Dutt (ed.), *Bodhisattvabhumi [Being the XVth Section of Asangapada's Yogacarabhumi]*の読みが参照されていないように思われる点である。「真実義品」ではなかったかもしれないが、Dutt ed.には採用すべき読みと感じた箇所もかなりあったような気も個人的にはしているので、『菩薩地』全体のサンスクリット校訂本を著者が将来意図されるような折には一応の参照は必ず果してもらった方がよいのではないかと考える。ただし、「真実義品」については将来を俟たずとも厳密なサンスクリットテキストが用意されたことは誠に喜ばしい。しかし、テキストはこの箇所だけが読まれるのではない以上、そのシノプシスを利用して、現行の他の諸本の参照も容易になるように工夫されて然るべきではなかったかと思う。私は自分の利用の便宜のために、「真実義品」の著者校訂のサンスクリットテキスト中の、シノプシスを指示する数字の箇所に、Dutt ed.; Wogihara ed.; D.ed. No.4037, Wi; P. ed., No.5538, Zhiの所在を順次に書き込んだが、それがある方が本書を利用する人にも便利だと思うので、敢えてそれを左に示しておくことにする。漢訳諸本については、今それを調べる時間がないので、省略することを諒とされたい。

1. : p.25, ll.3-5 ; p.37, ll.1-4 ; 20b4-5 ; 24b3-5, 2.1 : ll.5-7 ; ll.4-7 ; 20b5-6 ; 24b5-6, 2.2.1 : ll.8-16 ; ll.8-21 ; 20b6-21a3 ; 24b6-25a3, 2.2.2 : ll.17-21 ; p.37, 1.22-p.38, 1.1 ; 21a3-5 ; 25a3-6, 2.2.3.1 : p.25, 1.22-p.26, 1.2 ; ll.2-8 ; 21a5-7 ; 25a6-b1, 2.2.3.2 : ll.3-7 ; ll.9-17 ; 21a7-b2 ; 25b1-4, 2.2.4.1 : ll.8-10 ; ll.18-21 ; 21b2-4 ; 25b4-6, 2.2.4.2 : ll.11-14 ; ll.22-28 ; 21b4-5 ; 25b6-8, 3.1 : ll.15-16 ; p.39, ll.1-2 ; 21b5-6 ; 25b8-26a1, 3.2 : ll.17-26 ; ll.3-17 ; 21b6-22a4 ; 26a1-7, 3.3 : p.27, ll.1-3 ; ll.18-22 ; 22a4-5 ; 26a7-b1, 3.4 : ll.4-6 ; ll.23-27 ; 22a5-6 ; 26b1-3, 4.1 : ll.6-7 ; p.39, 1.27-p.40, 1.2 ; 22a6-7 ; 26b3-4, 4.2 : ll.8-11 ; p.40, ll.3-9 ; 22a7-b2 ; 26b4-6, 4.3 : ll.12-17 ; ll.9-18 ; 22b2-5 ; 26b6-27a3, 4.4 : ll.17-23 ; ll.18-26 ; 22b5-23a1 ; 27a3-6, 4.5 : p.27, 1.23-p.28, 1.2 ; p.40, 1.26-p.41, 1.4 ; 23a1-3 ; 27a6-b1, 4.6 : ll.2-9 ; ll.5-15 ; 23a3-7 ; 27b1-5, 4.7 : p.28, ll.9-14 ; ll.15-22 ; 23a7-b2 ; 27b5-8, 4.8 : ll.14-18 ; ll.22-28 ; 23b2-4 ; 27b8-28a3, 4.9 : p.28, 1.18-p.29, 1.3 ; p.42, ll.1-17 ; 23b4-24a2 ; 28a3-b1, 4.10, ll.4-16 ; p.42, 1.17-p.43, 1.7 ; 24a2-7 ; 28b1-29a1, 4.11 : ll.16-26 ; p.43, ll.7-23 ; 24a7-b5 ; 29a1-7, 5.1 : p.30, ll.1-8 ; p.43, 1.24-p.44, 1.9 ; 24b5-25a2 ; 29a7-b4, 5.2.1 : ll.8-16 ; ll.9-21 ; 25a2-5 ; 29b5-30a1, 5.2.2 : ll.16-21 ; p.44. 1.21-p.45, 1.4 ; 25a5-7 ; 30a1-4, 5.2.3 : ll.21-25 ; p.45, ll.4-12 ; 25a7-b3 ; 30a4-8, 5.3.1 : p.30, 1.26-p.31, 1.2 ; ll.13-19 ; 25b3-5 ; 30a8-b3, 5.3.2 : ll.2-4 ; ll.19-22 ; 25b5-6 ; 30b3-4, 5.3.3 : ll.4-10 ; p.45, 1.22-p.46, 1.7 ; 25b6-26a2 ; 30b4-31a1, 5.3.4 :

ll.10-18 ; ll.7-19 ; 26a2-6 ; 31a1-5, 5.3.5, p.31, l.18-p.32, l.4 ; p.46, l.19-p.47, l.7 ; 26a6-b3 ; 31a5-b4, 5.4.1 : p.32, ll.5-10 ; ll.8-15 ; 26b3-5 ; 31b4-6, 5.4.2 : ll.11-21 ; p.47, l.16-p.48, l.6 ; 26b5-27a3 ; 31b6-32a5, 5.5 : ll.21-22 ; p.48, ll.7-8 ; 27a3 ; 32a5, 6.1 : l.23 ; ll.9-10 ; 27a4 ; 32a6, 6.2.1.1, p.32, l.23-p.33, l.2 ; ll.10-13 ; 27a4-5 ; 32a6-7, 6.2.1.2 : ll.3-9 ; ll.14-22 ; 27a5-7 ; 32a7-b3, 6.2.2.1 : ll.9-13 ; p.48, l.23-p.49, l.2 ; 27a7-b1 ; 32b3-4, 6.2.2.2 : ll.14-22 ; 3-15 ; 27b1-5 ; 32b4-8, 6.2.3.1 : p.33, l.22-p.34, l.10 ; p.49, l.15-p.50, l.7 ; 27b5-28a4 ; 33a1-7, 6.2.3.2 : ll.11-15 ; p.50, ll.8-14 ; 28a4-6 ; 33a7-b2, 6.3 : ll.16-17 ; ll.14-16 ; 28a6 ; 33b2-3, 7. : ll.17-20 ; ll.16-21 ; 28a6-7 ; 33b3-5, 8.1 : ll.21-24 ; ll.22-27 ; 28a7-b2 ; 33b5-7, 8.2.1 : ll.24-25 ; p.50, l.27-p.51, l.2 ; 28b2-3 ; 33b7-8, 8.2.2.1 : p.34, l.24-p.35, l.5 ; p.51, ll.2-8 ; 28b3-5 ; 33b8-34a3, 8.2.2.2 : ll.5-7 ; ll.8-11 ; 28b5-6 ; 34a3-4, 8.2.2.3 : ll.7-8 ; ll.11-13 ; 28b6 ; 34a4-5, 8.2.2.4 : ll.8-12 ; ll.13-20 ; 28b6-29a1 ; 34a5-8, 8.3.1 : ll.13-14 ; ll.21-23 ; 29a1-2 ; 34a8-b1, 8.3.2 : ll.15-19 ; p.51, l.24-p.52, l.3 ; 29a2-5 ; 34b1-4, 8.3.3 : ll.20-23 ; p.52, ll.4-9 ; 29a5-6 ; 34b4-6, 8.3.4 : ll.24-27 ; ll.10-14 ; 29a6-b1 ; 34b6-8, 8.3.5 : p.36, l.1 ; ll.15-16 ; 29b1 ; 35a1, 8.3.6 : l.2 ; ll.16-17 ; ll.17-18 ; 29b1-2 ; 35a1-2, 8.3.7 : ll.3-4 ; ll.19-21 ; 29b2-3 ; 35a2-4, 8.4 : ll.4-10 ; p.52, l.21-p.53, l.2 ; 29b3-5 ; 35a4-6, 9.1 : ll.11-12 ; ll.3-5 ; 29b5-6 ; 35a6-7, 9.2.1 : ll.12-14 ; ll.6-8 ; 29b6 ; 35a7-8, 9.2.2 : ll.15-18 ; ll.9-14 ; 29b6-30a1 ; 35a8-b2, 9.2.3 : ll.18-19 ; 14-16 ; 30a1-2 ; 35b2-3, 9.3.1 : ll.20-21 ; ll.17-20 ; 30a2-3 ; 35b3-4, 9.3.2.1 : p.36, l.22-p.37, l.2 ; p.53, l.21-p.54, l.2 ; 30a3-6 ; 35b4-8, 9.3.2.2 : ll.3-5 ; p.54, ll.3-7 ; 30a6-7 ; 35b8-36a2, 9.3.2.3 : ll.6-10 ; ll.8-16 ; 30a7-b3 ; 36a2-6, 9.3.2.4 : ll.11-19 ; p.54, l.17-p.55, l.4 ; 30b3-7 ; 36a6-b3, 10.1 : ll.20-23 ; p.55, ll.4-9 ; 30b7-31a2 ; 36b3-6, 10.2 : p.37, l.23-p.38, l.4 ; ll.10-18 ; 31a2-4 ; 36b6-37a1, 11.1 : ll.4-8 ; ll.18-25 ; 31a4-6 ; 37a1-4, 11.2 : ll.8-13 ; p.55, l.25-p.56, l.6 ; 31a6-b1 ; 37a4-6, 11.3 : ll.14-23 ; ll.7-22 ; 31b1-5 ; 37a6-b4, 11.4 : ll.24-27 ; p.56, l.23-p.57, l.1 ; 31b5-7 ; 37b4-6, 12. : p.39, ll.1-2 ; p.57, ll.2-3 ; 31b7 ; 37b6-7, colophon : l.3 ; ll.4-5 ; 31b7-32a1 ; 37b7

このように別に示すと随分スペースを取るように思われてしまうかもしれないが、著者の校訂箇所pp.85-117のシノプシスを指示する数字の右横に、右に示したコロン以下の所在頁行を書き入れるようにすれば、これらは、本書の今の頁はおろか行数さえ増さずに印刷できるようなものなのである。

さて、以上の『菩薩地』「真実義品」のサンスクリットテキスト、及び、「摂決択分中菩薩地」の「真実義品決択」のチベット訳テキストの提示の後に、それぞれの和訳が示されているが、従来のこの方面に関する断片的ではないまとまった現代語訳は、次の二点しか知られていなかったと思う。

㈠相馬一意「「菩薩地」真実義章試訳」『南都仏教』第五五号（一九八六年三月）、一〇五—一一二頁

㈡Janice Dean Willis, *On Knowing Reality : the Tattvārtha Chapter of Asaṅga's Bodhisattvabhūmi*, Columbia University Press, New York, 1979

㈠は㈡の後に出たにもかかわらず㈡を参照しておらず、㈡は翻訳に先立ってかなり詳しい入門的考察を加えているが恣意的な解釈の域を出てはいない。㈠は「試訳」と銘打っているので後々に本格的な訳註研究を再提示することを狙っていたのかもしれないが、いまだにそれは果されていない。このような状況からみても、今回、高橋晃一博士が、「真実義品」、及びその直接的関係文献である「真実義品決択」とを伴った両テキストにつき、本格的訳註研究を提示した意義は誠に大きいのである。しかも、高橋博士御自身がその訳註研究に基づいて、本書の第二章の「本論」を中心にいかなる御見解を披瀝されたかは、以上に簡単に紹介したとおりであるが、これ以下においては、それらに対する私の感想をいささか述べながら終息に向おうと思う。

訳註に対する個々の批判的吟味は私自身むしろ今後に俟ちたいと考えているが、ここでは一読するなり気になったことを一つだけ指摘しておきたい。論述の中枢に関するような問題ではないが、「真実義品決択」の訳註の2.23.2には、「泡の集まりのように、水泡のように、陽炎のように、芭蕉の茎のように、発狂状態のように、…」（二一一―二一二頁）と訳されている部分があるが、これに対してなんの註記も施されていないのは意外な気がするのである。この能喩の所喩は五蘊で、このことは『瑜伽師地論』「思所成地」のparamārtha-gāthā第一七―一八頌を始めその一連の関連文献においてYogācāraたちによって知悉されていたはずだと考えられるからなのであるが、これについては既に「実修行派の経典背景の一実例」『駒澤大学仏教学部論集』第三七号（二〇〇六年十月刊行予定）なる拙稿を用意したのでそれを参照されたい。

本書では、論述中のvastuの規定に関し、「基体」という用語がかなり用いられているが、周知の用語と認識されているためか、その用法について特に断り書は見当らないようである。周知されている哲学用語であるならば、アリストテレスからの借用とも考えられるが、アリストテレスは、例えば、『カテゴリー論』の中で、通常「基体」と訳されるhypokeimenonを次のように用いている。

或るものは或る基体（hypokeimenon）について言われるが、しかしどんな基体のうちにもありはしない、例えば人間は基体としての或る特定の人間について言われるが、しかしどんな基体のうちにもあるのではない。（1a20、山本光雄訳による）

この「基体」について訳者の山本光雄氏はその訳註で次のように説明されている。

ここに「基体」と訳されたhypokeimenon（ギリシャ文字をローマ字に改めて引用）は直訳すれば、何か或るものの「基におかれてあるもの」の意味である。すなわち、有るものどものうちの或るものが「それのうちにあるところの基のもの」、あるいは「基にあって、それについて言われるところのものを受け入れるもの」のことである。（岩波版、アリストテレス全集1、六一頁、註3）

私は本書の「基体」がこのような意味で使用されていてもよいと思うが、それならばそれでどこかにそのような断り書を明示しておいて頂きたかったと感じるのである。

あるいはもし、松本史朗博士が提起した「基体説（dhātu-vāda）」の「基体（dhātu）」が意図されていたとするならば、それは必ず明記されるべきであったであろう。しかし、私がこれ以前の紹介中で著者の訳語である「基体」について元の形態を気にした限りでは、既に示したようにサンスクリット原語はadhiṣṭhāna、チベット訳語はgzhi gnasである箇所で「基体」は用いられておりdhātuは想定されていないようであるが、vastuがまたdhātuとも極めてよく通底し合う性格をもつことは、その語根からの派生形態からも知られる。それゆえ、もっと積極的にvastuとdhātuとの類似性を認めて立論した方がより建設的な主張も展開しえたのではないかと惜しまれるのである。松本博士が早くに提示していた「基体説」を唯識思想の考察に絡めて組織的に論述した著書が『仏教思想論』上（大蔵出版、二〇〇四年四月）であり、その出版は高橋博士の学位請求論文提出後のことであるが、その「基体説」そのものの問題提起は非常に早かったわけであり、それに注目して予めそのdhātuに関する分析をvastuの考察にも活かしておれば、上記松本書を巻末の「参考文献」に加えていないような事態を避けえたのではないかと思われる。

ところで、高橋博士は、vastuにつき、「真実義品」8.1で、サンスクリット原文に“tri-vastu-janakaḥ”（一〇七頁）とあるのに対して、チベット訳のデルゲ版には“dngos po gsum skyed pa”（28b1）、北京版には“gzhi gsum bskyed pa”（33b5）とあって、同じvastuという語が一方ではdngos po他方ではgzhiと異なって示されていることに注意を払っている（一七〇頁、註34）にもかかわらず、訳文としては単に「三つのvastuを生み出すもの」（一七〇頁、一二行）と訳すだけで、この重要な相違についてこれ以上論を展開した様子は見られない。しかし、注意すれば、この相違は、同じ文献中の、例えば8.2.2.4でも同じvastuに対して、この場合はデルゲ版と北京版との違いではなく両版ともにおいて一致して、先に出るvastuがdngos po、後のそれがgzhiと訳し分けられているように、唯識文献のみならず仏教チベット訳文献一般にも広く認められることであろうから、今後、同じvastuに対するdngos po（実在）とgzhi（基体）との訳し分けに注意を払っていくことは、サンスクリット語としてのvastu概念の考察にも資するところがあるであろうと期待される。

かかる相違にも注意を怠らないことを重視するのを当然のこととした上で言えば、私自身は、vastuに関し、それを全てを包括する唯一最終の究極的「場所（topos）」として「真如（tathatā）」や「法界（dharama-dhātu）」と同じ「実在（vastu, dngos po）」と認める一方で、その中に包括されているそれぞれのものに対して「基体（vastu, gzhi）」と「名称（nāman）」との関係から前者をやはり「実在」と認める思想傾向とは決して矛盾するものではないという立場を取っているが、この包括されている側の「実在」を「唯識思想」の確立展開という観点から強調していく時、そこにはその差異を重視しようとする研究者の視点も充分に成り立つ。かかる研究者の立場を代表する論文としては、高橋博士も批判的に言及しておられる、阿理生「瑜伽行派（Yogācāraḥ）の問題点—唯識思想成立以前の思想的立場をめぐって—」『哲学年報』第四一号（一九八二年三月）、二五—

五三頁や、池田道浩「『菩薩地』「真実義品」における二つのvastu」『印仏研』四五―一（一九九六年十二月）、三七二―三七〇頁などが挙げられよう。これに対する高橋博士の批判は、本書、二八―二九頁、三八―三九頁などで展開されているが、私にはその批判が必ずしも丁寧に展開されているとは思えない場合も多い。例えば、池田道浩氏は、求那跋摩訳の『菩薩善戒経』を最古の訳とする定説に準拠して、『菩薩善戒経』に見出しえない「分別がvastuを生み出す」などの考えは、元来の「真実義品」の所説とも矛盾しており、後世の増広であると見做す一方で、もしその見解に疑問があって、むしろ『菩薩善戒経』の側に削除があるなどとして『菩薩善戒経』最古説を認めない場合には、その「記述が削除された意図が説明されなければならない」（池田、三七一頁）と主張しておられるが、このような事例で、論証の一部でもその増広か削除かという問題に係る文言に関連している時には、その文言を引いて厳密に比較検討することが望まれるであろう。しかし、高橋博士は、『菩薩善戒経』のみならず一般に漢訳諸本の文言を示した上での語句の一つひとつの比較検討には極めて冷淡である。

次には、私自身への反省を込めて言わなければならない問題がある。それは「三性（tri-svabhāva）」と「三相（tri-lakṣaṇa）」、特に「性（svabhāva）」と「相（lakṣaṇa）」との関係についてなのだが、これに関し、高橋博士は次のように述べておられる。

三性（trisvabhāva）は『解深密経』では三相（*trilakṣaṇa）と表現されるが、一般に両者に違いはないと考えられている。（五〇頁、註4）

その一般説の根拠には私の名も挙げられているので、右のような見解には私も大いに責任があるとしなければならない。唯識思想の伝統的考えは、「摂相帰性体」であり「性相各別」なのであるから、「性」と「相」とを軽々しく同置することがあってはならないのであるが、私は、木村誠司氏の「唯識文献における三性と三相について」『駒澤短期大学仏教論集』第一一号（二〇〇五年十月）、三四二―二一七頁、及び、そこに集約されていくことになるその先駆的諸論文が現れるまでは、伝統的考えは知りつつも、「三性」と「三相」ということになるとかかる区別さえ念頭を過らなかったようであり、最近は深く反省している。他人の書評に自己反省なぞ記すべきではないかもしれないが、既に考えを改めている私の旧著に言及がなされていたゆえに、それを根拠に誤りが重ねられないように敢えて一筆を加えさせて頂いた。

さて、本書に対する感想を述べ始めてからやや筆が滑って言葉が過ぎた箇所があるかもしれないが、本書がまさにそのタイトルどおりvastu概念を中心に『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開を克明に追求しようとした勝れた業績であることはここに繰返すまでもない。それゆえ、vastu概念の探究を中心に据えて唯識思想一般を広く研究していくことが本書を基点に進展していくことが大いに期待されるのである。

最後に、だからこそ、言わずもがなのことを一言だけ加えておきたい。この叢書の一般的傾向からいっても、本書の作成にはパソコ

ンのワープロ機能が駆使されたのではないかと想像されるが、それならば、私のようなアナログ人間の場合とは異って、索引の作成も比較的容易に行われたのではないかと思う。本書は、テキスト提示を基本に据えた訳註研究を主としているから価値も高いのであるが、克明な用語索引が付されていたならば、その価値はより一層増したであろうと、過ぎたことであっても、なお鶴首されるのである。

（二〇〇六年六月二十九日）

〔高橋晃一著『『菩薩地』「真実義品」から「摂決択分中菩薩地」への思想展開—vastu概念を中心として—』、本文、二三〇頁、目次、四頁、Bibliotheca Indologica et Buddhologica 12〔インド学仏教学叢書12〕、二〇〇五年十二月二十八日初版発行、東京、山喜房仏書林、定価、本体七、〇〇〇円＋税〕